

Forex

株式会社 ジャパン
エコノミックパルス
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町
2-33-5
Tel 03-5962-3910
Fax 03-5962-3913
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight

2023年10月10日（火）

調整ドル安と円高、持続余地と一服にらむ

FRB政策と米金利、中東と原油、米決算など焦点

今週の為替相場は調整的なドル安と円高について、持続余地と一服をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が147.30－149.80円、ユーロ/円は154.80－158.60円。前週以降は米FRB幹部による追加利上げ慎重発言や米賃金などの落ち着き、中東情勢の緊迫化による安全逃避等を受けて、米国債の価格反発と金利低下が見られ、ドルが反落となってきた。リスク回避は全般的な円の買い戻しに作用している。今週以降はFRB金融政策と米金利の動向、中東情勢と原油、米企業の決算発表などが焦点になる。

FRB幹部発言、米物価指標、FOMC議事録など注目

今週の為替相場で注目されるのは、米国でのFRB幹部発言や経済指標、11日のFRB・FOMC議事要旨（9月19－20日開催分）、原油相場の動向などを受けた今後のFRB金融政策と米国債金利の行方だ。

前週以降にはFRB幹部から、7月以降の米長期金利上昇と金融環境の引き締めりを踏まえて、追加利上げへの慎重発言が相次いでいる。米サンフランシスコ連銀のデーリー総裁は10月5日、長期金利の上昇による債券市場のタイト化について、「ほぼ1回分の利上げに相当する」との見解を示した。今週以降、11月の利上げ見送りを含めて、現状段階からの利上げ休止入り観測が高まると、ドルの戻り売り圧力が強まりやすい。

米指標では11日のPPI（生産者物価指数）、12日のCPI（消費者物価指数）などが注目される。基本的にはFRB利上げ効果を含めて、賃貸住宅価格の下落や前週末に示された賃金低下などが物価の押し下げ要因となる。ただし、原油やガソリンなどの価格再上昇により、物価の高止まりが示される可能性も無視できない。

前週末からは中東情勢が緊迫化し、パレスチナ自治区ガザを実効支配するイスラム組織ハマスとイスラエルとの衝突が激化してきた。週明け9日以降の段階では、安全逃避が米国債への資金回帰と米債価格の反発、米債金利の低下に作用している。7月から加速されてきた米10年債金利の上昇が一服してきたことは、ドル/円を含めた全般的なドルの反落材料として注目されやすい。

その反面、中東情勢の緊迫化は、ドル高材料となる潜在余地も残されている。今週以降は中東情勢に対する市場反応次第で、米債金利とドルが再上昇となる局面も注視されそうだ。具体的には安全逃避によるドル買いの余地のほか、中東混乱と原油供給の打撃懸念などによる原油相場の一段高（インフレ上昇圧力）、こうしたリスクを含めたFRBのインフレ警戒姿勢継続（利上げ完全休止の慎重化）、米国の対イスラエル支援や軍事的支援に伴う財政赤字拡大（米債価格は下落で金利は上昇）といった要因がある。

ドル/円は前週10月3日に昨年10月以来の150円超えへとドル高が進んで以降、調整的なドル安と円高に振れている。クロス円取引でも、外貨の戻り売り圧力が強まってきた。背景としては1ドル＝150円超えによる一旦の達成感や、日本の当局による円安阻止介入への警戒感（3日は現状「介入せず」との観測）、米10年

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

債金利の一旦の上昇過熱感——といった要因がある。

その他、前週以降は米指標での平均賃金と失業率の落ち着きなどが調整的なドル売り、中東情勢の緊迫化によるリスク回避などが円の買い戻しにつながっている。過去比で「安全逃避通貨」としての円の魅力は減退しているが、現在は円安進展と裏表で、投機的な円のショート・ポジション（売り持ち）が大きく積み上がっている。リスク回避による一旦のポジション手仕舞いや利益確定などが、円ショート整理とドル/円、クロス円で全般的な円高を促す余地が残されている。

短期的には調整円高のリスクがあっても、中長期スパンでは円安余地や円高抑制の要因が依然残されたままだ。具体的には中東混乱と原油一段高の場合の日本の資源輸入増と貿易収支の再悪化、FRBやECBの「利上げ休止」織り込みによるドル売りやユーロ売りが一巡したあとの、米欧での金利高止まり長期化（対円でのドル売りやユーロ売りに制約）、原油高などによる対円での資源国通貨の上昇余地（豪ドル、NZドル、カナダ・ドル、ノルウェー・クローネなど）——といった要因が注目される。その他の注目ポイントは以下の通り。

<週足、ドル/円は8週平均の上抜け定着焦点>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円は7月7日週からのドル反落を経て、前週の150円超えからはドルが上げ渋りとなってきた。10月10日アジア市場時点の数値によると、「8週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンド」では、8週線147.96円前後の維持が焦点になっている。

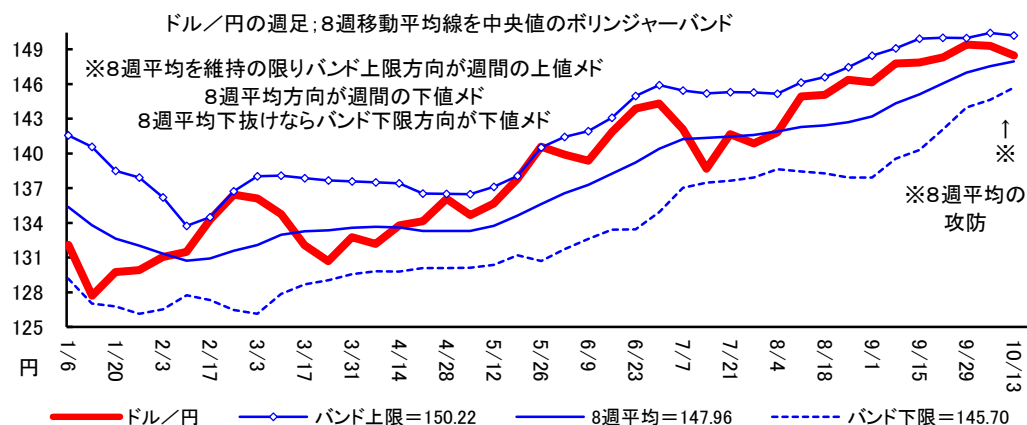
同ラインを上抜けしている限りは、基本的なドル高の基調が継続。8週線などが下値メドとなり、週間ベースでの上値メドとしてはバンド上限150.22円の方やその上の方向などが意識されていく。反対に完全に下抜けとなれば、ドルの上値の重さを確認。週間ベースでのドル下値メドとしては、バンド下限145.70円の方やその下の方向が視界に入る。

クロス円取引は、通貨ペアごとに違いが見られている。ユーロ/円やポンド/円、スイス・フラン/円は6月中旬からの外貨反発を経て、8月後半からは外貨の上値が切り下がってきた。今週以降は外貨の下落が本格化していくか、基本的な外貨の底堅さが維持されるかの見極めとなる。

一方、豪ドル/円やNZドル/円、カナダ・ドル/円については、9月からの外貨が再上昇となってきた。今週以降は緩やかな上昇基調が固まっていくか、あるいは再下落に移行するが焦点になっている。いずれのクロス取引についても、「7週や13週移動平均線を下抜けるか上抜けるか否か」が目先の方向性を左右していく。

<ECB幹部発言・指標と今後の金融政策>

欧州市場では9月以降、物価を含めた経済指標の下振れが目立っている。前週にはECB理事会メンバーであるカザークス・ラトビア中銀総裁が9日、「インフレ率が目標を持続的に下回るとの予測が立てば、ECBは利下げを開始する可能性」



と述べた。9日にはインフレ警戒姿勢が強い利上げ積極派の独連銀から、ブーフ副総裁が「金利上昇が金融安定に及ぼすリスクを警戒」といった発言が見られている。こうした要因もあり、利上げ休止や来年の利下げ観測が一段と高まるとユーロの戻り売り圧力が強まりやすい。

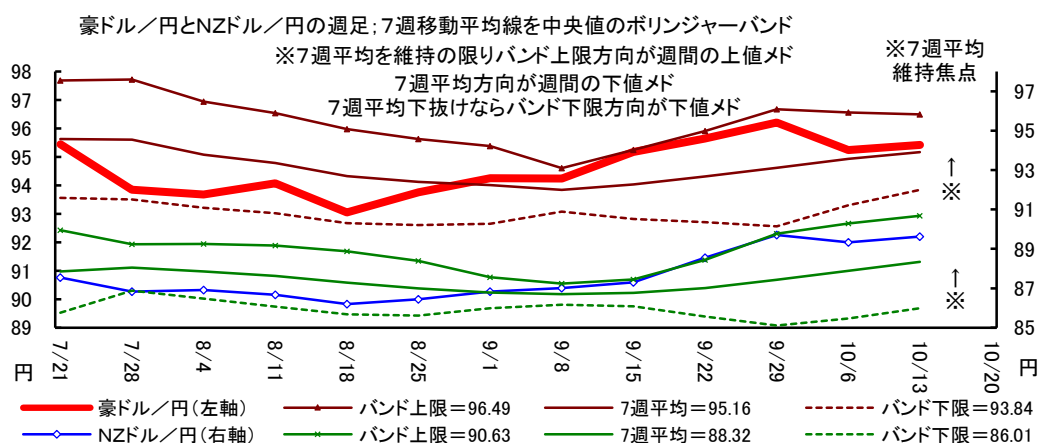
一方でECB理事会メンバーのクノット・オランダ中銀総裁は9日、中東情勢の緊迫化を踏まえて、「原油高が継続すれば、ユーロ圏のインフレへの上昇圧力になる」との警戒感を示した。季節的に冬季に向けては資源エネルギー価格が上昇しやすく、欧州でのインフレ高止まり警戒やECBの利下げ遅延観測が高まると、ユーロが一旦の反発となる余地も残されている。

＜米企業の決算発表、リスク選好・回避を左右＞

米国株市場では12-13日前後から、米企業による決算発表が本格化していく。米株は8月以降、長期金利上昇のほか、決算見通しの不透明感もあって調整下落に見舞われている。その点で決算内容が事前警戒ほど悪くなかったり、悪化でも一旦の悪材料出尽くしという評価につながれば、米国株は上昇となる。

米株には前週以降、長期金利の低下という追い風も吹き始めた。今週から米株が反発となれば、「安全逃避通貨」であるドルは下落となる可能性がある。一方でクロス円取引では、リスク選好が円安と非ドル通貨高を促す余地も無視できない。

反対に決算発表が失望になると、リスク回避に作用する。安全逃避通貨であるドルは下支えされるものの、クロス円では非ドル通貨安と円高が進展。ドル/円はドルが底堅さを示しても、ドル高・円安の度合いは抑制される可能性がある。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。